

不登校児童生徒等支援研修会

8月9日(金)、「不登校児童生徒等支援研修会」を行いました。富山県総合教育センター 教育相談部 客員研究主事 濱野 恵美先生、研究主事 伊東 史子先生を講師にお迎えしました。市内小・中学校の先生方が参加しました。

(1) 指導講話

① 最近の不登校の傾向について

「学校へ行きたいけれど、行けない。」

- ・勉強が分からない
- ・いじめられる
- ・給食が苦手
- ・家族の病気が心配
- ・宿題が出せない
- ・行事の練習が嫌
- ・友達がいない
- ・うるさい所が苦手
- ・部活動が厳しい
- ・グループの授業が苦手 等



指導講話 最近の不登校の傾向について知る。



伊東先生

不登校の**要因は多岐**にわたります。手立てを講じて登校につながるケースもありますが、(過去にうまくいったケースと同様の)手立てを講じても、うまくいかないケースも当然出てきます。子供のためにすぐに何かしたい、効果的な支援方法を知りたいという先生方の思いも十分理解できますが、**支援マニュアルのよなものはありません。**

② 思春期の子供の心を考える。

学校なんて辞めてやる。先生、うざい。もうほっといて。



≠

(放っておくと) 放っておかれた…。見捨てられた…。



大人は言葉で辛さを表現できますが、子供にとって辛さは表現しにくいものです。また、この時期はイライラが表れやすく、本人もどうしていいかわからない状態です。大人は**言っていること≠伝えたいこと**と思うことが大前提です。



濱野先生

③ 教室にいる子供の心を考える (青・赤・緑色で表してみる)。

青モード:「シャットダウン」	赤モード:「闘争・逃走」	緑モード:「社会的つながり」
自分を守るため、シャッターを下ろしている (気持ちをふさいでいる)、固まっている状態 	自分を守るため、戦っている、はりつめている、不満を我慢できない状態 	自分は守られているという「安心・安全」を感じている、穏やかな状態 

不登校傾向の子供は、青の状態。教室で目立つ子供は、赤の状態。

- ・教室にいるあなた(先生)は何色?
 - ・教室のあの子(気になる子)は何色?
 - ・教室のあの子(気になる子)の周りの子は何色?
- と考えてみましょう。**気になる子だけでなく、教室全体的子供達の心**を考えることが大切です。例えば、「気になる子を叱っているとき、その子の周りの子は何色?」「不満を言い続けるあの子(気になる子)の周りの子は何色?」といった具合です。

また、青の子・赤の子の**周りには緑の人(先生や友達)がいるかな**と考える視点もちます。**緑の人が近くにいることで、緊張している状態・イライラしている状態が和らぎます。**



ワーク 教室の子供の心について考える。



濱野先生

(2) 事例検討：不登校傾向の児童生徒の支援を考える（PCAGIPを使って）。

【方法】

- ①事例提案者は、児童生徒の様子等を簡単に述べる。
- ②参加者は事例の状況を理解するために、分からないこと・確かめたいこと・気なることを質問していく。質問は一人ずつ一問ずつが原則。
- ③事例提案者は、質問に回答。
- ④記録者は、質問と反応をホワイトボードに書く。これを皆で眺めて情報を共有する。
- ⑤質問と回答が出た時点で、状況を整理する。



グループワーク 様々な視点から不登校傾向の子供の気持ちや支援を考える。

【基本姿勢】

- ①参加者が中心でつくっていくこと。
- ②参加者から出される多様な視点で学べること。
- ③はっきりとした結論が出なくてもよいこと（事例提案者にヒントが生まれることが大切）。
- ④約束：事例提案者のやり方を絶対批判しないこと。



伊東先生

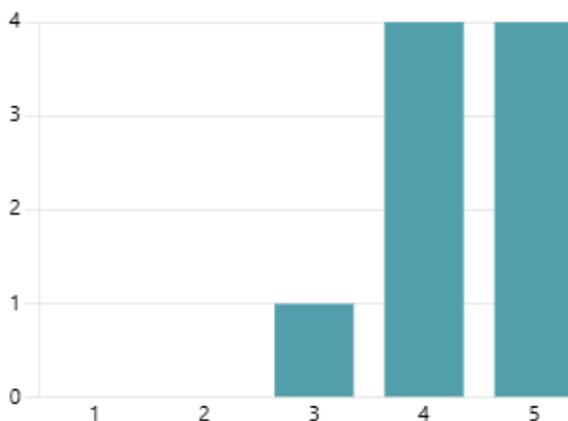
「家族構成」「本人の思い」「家族の思い」「友人関係」「欠席しているときには家には誰がいるか、本人はどのように過ごしているか」「趣味や習い事」等、質問しながら、児童生徒の状況を整理していきます。事例提供者は、質問に対して「分からない」と答えても大丈夫です。
支援方法に答えがあるわけではないので、はっきりとした支援方法はこの場では出ないかもしれませんが、大切なのは、「こんな視点もあったんだ」「次はこんなふうにあの子と関わってみようかな」と、事例提供者にヒントが生まれることです。

○事後アンケートより（9名回答）

3. 本日の研修の満足度を星の数でお答えください。(0点数)

詳細

4.33
平均評価



感想	評価
不登校児童生徒は、年々増加していることが分かった。また、事例提供してもらった事案を聞いて、学校として対応していくことについて整理できた部分もある一方で、学校だけでは対応できないこともあることが分かった。	5
PCAGIP の事例検討が本校のケース会議でも使っていきたいと思いました。客観的な視点から事例を見て、見えていなかった部分や新たな視点で捉えて、少しでも子供のためにできる手立てを考えられるなと思いました。	5

不登校児童について、心理、生物、社会等の関わりがあること	4
今日の研修を通して、子供は言葉でうまく伝えられなかったり、思っていることとは違うことを言ったりするということを念頭において関わるのが大切だと思いました。学校に来て欲しいという教師の思いだけが突っ走らないように本人の本当の気持ちはどこにあるのか見極めながら支援していきたいと思いました。	4
最後の事例検討で PCAGIP を使った話し合いは有意義でした。話している中で事例提供者が次の課題を自然に見つけていかれたのが素敵でした。本校でも事例検討会で試してみたいです。	5
事例検討をする際に、ただ事例を挙げて、話し合いを進めるのではなく、参加者からいろんな質問を一問一答形式で答えていく方法を体験しました。意外と見逃している要素などが多く挙げられて、とても良いなと感じました。また、何かケース会議などでも活用できるかなと感じました。	3
ポリヴェーガル理論という考え方があることを知らなかったので、子供をみる視点が少し広がりました。また、今まで当たり前のように学校では挨拶運動をしていますが、挨拶があまりできない子供をあまりよくないとしていたように思います。不登校の子供だけでなく今登校している子供に対してもきちんと目を向けて接していかなければいけないことを気づかされました。そして、グループでは私の事例を取り上げてくださったおかげでいろいろな先生方から質問され、自分が気付いていない見方を教えていただき、多様な見方ができていなかったことが分かりました。校内でもいろいろな先生方と対話をしながら、どのような対応をしていけばよいか、どのように関わるとよいかを模索したいと思います。ありがとうございました。可能であれば、もう少し研修会の時間が長ければ、もっとゆっくりグループでの時間がとれたのではないかと思います。	5
子供のうつということに関して今まであまり認識していなかった。今回の研修を通して、子供の見取り方の意識を変えていく必要があるなと感じた。今回の研修で学んだことを2学期からの生活に生かしていきたい。	4
事例検討がとてもよかったと感じました。全く状況が分からない生徒について質問を繰り返した事で、事例を提供してくださった先生にも新たな気づきがあったのではないかと感じました。本校でもぜひ実践してみたいと思いました。有意義な時間をありがとうございました。	4